

第2次大戦の日本の行動（その10） この研究のまとめ

01602334 松山大学 湊 晋平 MINATO Shimpei

まえがき

昭和天皇は独白録〔1〕の中で、敗戦の原因は4あると思う。

第1は、兵法の研究が不十分であったこと、即ち孫子の敵を知り、己れを知らば百戦危からずという根本原理を体得していなかったこと。

第2は、余りに精神に重きを置きすぎて科学の力を軽視したこと。

第3は、陸海軍の不一致

第4は、常識ある首脳者の存在しなかったこと。往年の山県、大山、山本権兵衛、という様な大人物に欠け、政戦両略の不十分な点が多く、且軍の首脳者の多くは専門家であって部下統帥の力量に欠け、所謂下剋上の状態を招いたこと。

と述べられている。”第2次大戦における日本の意思決定”の総括としてこのお言葉に沿い検証する。

1. 兵法の研究が不十分である。

- a. 開戦前に戦争終末をにらんだ長期戦争指導計画がなかったこと：日露戦争は戦争終決のシナリオを持って開戦したが、第二次大戦は「2年先はわからない」「2年間は互角に戦える」という漠然とした見通し〔2〕で開戦し、終戦努力を行わなかった。
- b. この結果攻勢の終末点を超えて作戦し、作戦の失敗に応ずる柔軟な作戦指導を行わなかったこと：
- c. 初期作戦の成功に酔い、これに続く適切な戦争計画を策定しなかった：
 - ・陸軍は占領地域の軍政に重点を向け、さらに機会あれば対ソ作戦を指向した。
 - ・海軍は山本G F長官の「積極的連続決戦主義」〔3〕に引きずられた。
- d. 米軍の反攻様相に対する誤判断：米軍の本格的反攻開始を1943年後半以降と判断していたが〔4〕、ソロモン諸島の島伝いの戦闘で消耗戦に引きずり込まれた。

陸軍は対ソ戦重視に固守し、島伝いの戦闘に対する学習と改善を図る実行力に欠けていた。海軍は開戦以

後の太平洋における戦況が、戦前の想定と様相が変化していたにもかかわらず、艦隊決戦を目指す硬直化した考えに捉われ消耗を重ね破れた。

- e. 情報の軽視と独り善がりの判断：軍の作戦担当者は、冷静な敵情分析に基づいて作戦計画を策定せず、敵情を恣意的に判断し、自己の望むシナリオどおり相手方が行動するものとして行動した。また戦闘による戦果の判定を情緒的に判断し、現実を冷静に分析するのを避けようとした〔5〕〔6〕。

2. 精神重視で科学の力を軽視

- a. 戦闘技術を重視したが、有効な兵器開発や、補給・兵站を軽視した：工業生産力が劣るうえ科学開発に遅れを取るため、緒戦の優勢も敵の有力な兵器の登場やレーダーやソナーの後れにより劣勢となり、遂に原子爆弾により止めを刺された。補給兵站力の弱いため、戦没者の8割は悪疫や餓死だった。逆に連合国は原子力・抗生物質・プラスチック等新しい産業発展の基となった製品を開発した。
- b. 工業生産力の大きな格差に配慮せず戦争早期終結を図らなかった：連合国と枢軸国との兵器生産は1941年から逆転し1943年には4：1となった。米国は工業生産力で日本の10倍以上であった。これに対して長期戦を続けるのは無謀な政策であった〔7〕。
- c. 本来冷静・合理的であるべき作戦計画に倫理的な強制を加えた：「軍人精神」概念が強調され、権利・義務や効率性概念を無視し、卑怯、利得的の次元で戦略戦術を評価した。また、捕虜の取り扱いを無視し、国際法を重視せず日本的倫理感で物事を判定処理した。これは逆に国力の劣る日本を制限戦争に止めずに無制限戦争に導いた。
- d. 人的資源に対する配慮が不適切：軍人優先の考えが取られ、人的資源を適材適所で有効に活用する工夫がなされなかった。精神面を強調するあまり費用対効果を無視した。止むを得ない戦法として特攻作戦を実施したが、これはせっかく育成した人材の消耗の割に、

敵に与えた損害は予測したよりは少なかった。

3. 陸海軍の不一致

- a. 陸海軍間の本音の話し合いの欠如：開戦の意思決定、作戦計画の転換等の重大局面の意思決定等においても、面子や資材配分の思惑もからんで実情についての話し合いがなされず、事実を隠蔽しようとした。（ミッドウエイ、ソロモン、マリアナ、レイテの戦闘）
- b. 戦力・生産力の取合い：日本の主敵は太平洋を西進する米海軍であったが、これに対応する戦争資源を陸海軍に適切に配分せずにお互いに取り合った〔8〕。
 - ・物的資源は主敵に直接対面している海軍を中心に配分せず陸海軍が均等に分け合った。
 - ・人的資源は陸軍が優勢で、戦局に関係しないシナ大陸に釘付けされ遊兵となった。
- c. 作戦構想の不一致：中部太平洋からの米軍攻勢に対応するため、協力してマリアナ諸島の防衛強化を図るべきであったが、陸軍は精鋭兵団をシナ大陸に止め、大陸縦貫作戦やインパール作戦を実施した。

4. 常識ある首脳者の不在

- a. 首脳者が国家全般とか大局的視野に立たず局所的自己本位的立場を固守した：開戦の意思決定や、戦局の認識について責任者は局所的立場を固守した。特に長期戦を戦うことは困難であるとの戦前の認識にもかかわらず、緒戦の成功に酔って早期終結の努力を図らず無為に過ごした。
- b. 憲兵政治の強制による反対意見の圧迫：東条首相が国民の総意を汲み上げようとせず、自己の考えに従わないものを懲罰的に遇した〔9〕。
- c. 首脳者が無責任であった：上層部が自らの努力や検討を欠き、下部のサポートに安住した。部下指導力に欠け下剋上の傾向が見られた。敗戦が必至になった時でも政策転換を積極的に図らずに無為に過ごした。
- d. 制度的地位に安住した学校秀才の無能：軍の大学を優等で卒業した学校秀才が、戦争指導で度重なる失敗にもかかわらず中枢部に残り、失敗から学ばずに誤りを重ねた。

まとめ

日本は、第2次大戦に適切な指導者を得ず、先の見通し・終結計画を欠き参入した。国民の非常な努力や大きな犠牲にもかかわらず、悲惨な敗戦を迎えた。日本の行動について深く検討し、学ぶことは今後の国の運営や、企業・色々なシステムの基本計画の策定、運用にも大いに有用であり意義深いことと考える。この研究では昭和天皇のお言葉に沿って検討した。

参考文献

- 1] 文芸春秋, 1990 12月号, pp94~145, (1990)
- 2] 「太平洋戦争への道」別巻 資料編, 朝日新聞 p560, (1988)
- 3] 防衛研修所, 「戦史叢書 大本営陸軍部(3)」, p634, (1970)
- 4] ウエデマイヤー, 「ウエデマイヤー回顧録」, p103, 読売新聞, (1967)
- 5] 実松謙, 「情報戦争」, 図書出版会, (1972)
- 6] 堀栄三, 「大本営参謀の情報戦記」, 文春文庫, (1996)
- 7] ポール・ケネディー「大國の興亡」下, p91, 95, 127, 草思社, (1988)
- 8] 高木惣吉, 「自伝的日本海軍始末記」, 光文社, (1971)
- 9] 大谷敬二郎, 「昭和憲兵史」, みすず書房, (1966)